

# 本学基本理念につながるキャリア教育実現に向けて

小林 正二

(受領日：2012年4月17日)

高知工科大学 教育講師室

〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

E-mail:kobayashi.shoji@kochi-tech.ac.jp

**要約：**学生の多様化を問い直すことで、大学における望ましいキャリア教育のコンセプトを明らかにし、本学におけるキャリア教育のあり方を検討した。その結果、本学基本理念とマッチングが取れたキャリア教育の推進が不可欠だとの判断に達したので、その実現に向けたアクション・プランを提案するものである。

## 1. 緒言

平成23年4月に本学の教育講師として着任してから1年が経つ。それまでは、都市部の“ものづくり”企業で働いており、教育界とは無縁であった。今、大学では、大学進学希望者全入の時代を迎え、“学生の多様化”に伴う学生の質の問題や“学生の進路確保”の問題など多くの課題を抱え、特にキャリア教育への適切な対応が急務となっている。

本学は開学以来15年と歴史は浅いが、学生の多様化に対応した教育システムはかなり充実している。しかしながら、公設の民営大学（私立大学）から公立大学法人に移行して4年目を迎える現在、学生の多様化に“より適切”に対応するための改善努力が求められている点では、他大学と同じある。

キャリア教育2年目を迎えるに際し、学生の多様化の本質とキャリア教育のあるべき姿を再考し、今後の授業に生かしたいと考えている。

## 2. 学生の多様化と本質的な教育課題

### 2.1 大学生の多様化の実態

今の学生は多様化したといわれるが、実際どのようなことであろうか。本学に着任してからの1年間の経験や文献の報告、あるいは学外講師の講演内容等<sup>1,2,3,4,5,6,7)</sup>を参考に、学生の多様化という現象について調査し、次の通り整理した。

i) 多様な入試方法の採用で、様々な能力の学生が入学して来る（学ぶ能力に幅）。…特定の分野で学業優秀者、スポーツ優秀者などが増加。

ii) 社会の価値観の多様化で、様々な関心を示す学生が入学して来る（進路選択に幅）。…音楽と仕事両立希望、教師志望、専門課程を履修しながらそれを不問とする分野への就職志望などが増加。  
iii) 大学進学率の上昇で、様々な経歴の学生が入学して来る（経歴に幅）。…工業高校などからの進学者（どちらかといえば技能志向者）が増加。  
iv) 偏差値重視で、様々な動機で学生が入学して来る（学ぶ姿勢に幅）。…センター試験の結果でこの大学に来るしかなかった、友達が行くからきたなど目的意識の希薄な学生が増加。

以上のことから、学生の多様化には複数のパターンがあることが分かる。i)～iv)のパターンのうち、ii)は価値観の多様性にもとづく正のイメージをもつ学生の多様化といえるが、i) iii) iv)は就職戦線の困難さを連想させる負のイメージをもつ学生の多様化となっている。

しかし、学生一人ひとりが、1つのパターンを唯一もつものだと決まっているわけではなく、学生1人に複数のパターンが適合する場合もあると考えられる。よって、学生の多様性としての個性は多くの要因が複合して形成されるもので、必ずしも負のイメージだと決めつける必要もない。

### 2.2 学生の多様化の本質

次に、学生の多様化は多くの要因が複合していることに着目し、以下に学生の多様化が生じた歴史的背景を分析する。

- i) 我が国の戦後経済の高度成長・発展と成熟化・大衆化、政治・経済のグローバル化が進展したことに伴い多様な価値観が生まれ、サービス経済化が進んだ。そして、ユビキタス社会の到来で、情報の交換や情報収集が容易となり、情報の融合も進んだ結果、社会の価値観の多様化が“より”進展した。
- ii) また、社会の価値観の多様化には、少子高齢化や地方地域の若者減少という人口動態も見逃せない。というのも社会の価値観が多様化する中で大学進学率が一段と上昇したのであるが、大学もまた急増した結果、少子化社会では大学志願者の大部分が入学できる状況となった。こうして、大学には多様な個性を持った学生が入学してくるようになったのである。
- iii) 一方、地方の若者の大部分は、我が国の経済発展の担い手として都会に出て働き、高層マンションに暮し、核家族を形成した。その結果、多くの子供は“もやしっ子”として成長、年齢の割には精神的な逞しさに欠けるモラトリアム人間出現の下地を作った。このような子供たちが大学の大衆化とともに、目的もなく大学に入学して来るようになった。

以上の分析結果から、学生の多様化は単なる教育に特化した現象ではなく、むしろその本質は戦後の少子高齢化やグローバル化を含む我が国政治・経済の発展形態など社会の挙動<sup>1</sup>と関係しており、社会現象の1つだと考えるべきである。

### 3. 世界の動きと日本社会の課題

#### 3.1 世界の動きと日本社会

18世紀後半に産業革命がヨーロッパの島国で芽生えたが、そのうねりは西洋文明として19世紀から20世紀にかけて地球を駆け巡った。それは、あたかも台風が周りを破壊しながら成長していくように、産業革命という鋭い利器を持った西洋文明の嵐が、地球資源の開発と世界人口の急増を伴いながら、英国→欧州→米国→日本へと吹きまくり、今はBRICsを中心に成長の軌跡をばく進するそんな莫大なエネルギーをもつ文明の嵐である。

文明が通り過ぎた後の欧米諸国は、高度経済成長の時代を終わり低成長・成熟化の時代へと向かったわけであるが、地球規模の自然破壊という文明の負の部分が21世紀初頭に入って一段と顕在化し、そこには自然開発のこれまでの付けが回ってきたという印象がある。それまでの自然の開発一辺倒の

文明の在り方に緩やかながらブレーキがかかったように見受けられる。

我が国も欧米諸国と同様、既に成長期を過ぎ、成熟期に入っているわけであるが、西洋文明が国内に行き渡った21世紀初頭の今、我が国古代から続く自然との共生を大切にしてきた長江文明<sup>2</sup>に起源をもつ日本文化が途絶しようとしている現状に危機感を募らせている人も多いのではないかと考える。

#### 3.2 我が国が抱える課題

古代から続く日本文化が途絶しようとしているその実態は、西洋文明の流れをくむ日本文明ともいえる大都市を中心とした我が国の繁栄と引き換えに、地方地域の文化が想像を越える衰退の危機に見舞われ、極めて深刻化している。

政府は、地方の衰退に対し過疎対策を40年間にわたって実施、総額80兆円を超える財政<sup>3</sup>を投入してきた。その結果、道路や下水道などのインフラ整備は図れたものの、一向に地方・地域の衰退に歯止めがかからない状況である。地域の絆は細くなるばかりである。しかし、昨年3月に発生した東日本大震災の復興過程を通して、絆の復興に果たす重要性が改めて認識できたことに希望を見出したい。

絆をやや大げさに比喩的に表現するならば次のようになる。星は物質やエネルギーが拡散する中にあっても物質が引力によって引き合うことで誕生したことが知られているように、人間の価値観が多様化に向かい人間関係が疎遠になる中でも“絆”という引力によって多くの異なった価値観を持つ人間が心をつなぎ留め“まとまり”を形成することは可能だと考える。ただし、絆は、物質の世界の引力と違って人間同士の間に自然に生まれるものではなく、地域に暮らす人々の“地域のまとまり”を復活させたいという“意思の大きさ”やお互いの“信頼の強さ”が重なり合う結果生じる引力である。つまり、地域の活力源とは、絆を媒介に地域社会の理念に大半の人々が共鳴することから生まれるものだと考える。したがって、我が国の文化の選択に関わる問題には、先ず、絆を深めることが不可欠な課題であるといえる。

#### 3.3 日本の教育が抱える課題

以上のような国際情勢や我が国の課題を目の当たりにして、学生の多様化に関わる放置できない教育課題として次の2点を挙げる事が出来る。

- i) 最初に見たように、学生の多様化を負のイメージで捉える教育環境では、とても文明の選択を任せられるようなパワーと見識を備えた人材を輩出

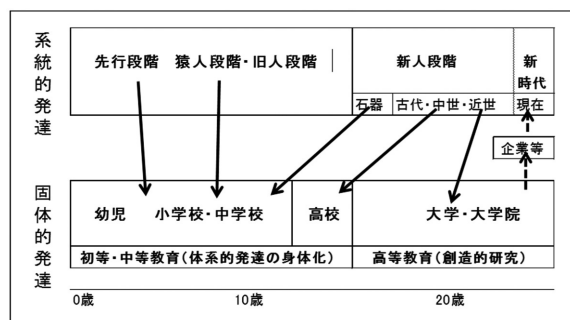
できるとは考えにくい。この要因として、大学の  
大衆化が考えられる。このままでは、高等学校と  
同様に大学においても義務教育化の一面を助長さ  
せ、いわゆるモラトリウム人間としての学生を放  
置することになりかねない。ここに、モラトリウ  
ム人間から脱却させる教育に篤い期待がかかる。

- ii) このような進むべき方向を決する重要な岐路に  
立つ我が国にとって、単に今ある仕事をこなすだ  
けの人材ではなく、価値観の多様化に伴う多様な  
情報の中から有益な情報（インテリジェンス）を  
選り出し、世界の動きを洞察することで、自分の  
役割を見出し、世界の中の日本としての将来を構  
想し得るそんな理念とパワーを持った多くのリー  
ダーを輩出させることが急務である。そのため  
には、学生の価値観の多様化の正の一面を引き出す  
教育に篤い期待がかかる。

これら上記2つの課題解決に当たっては、モラト  
リウム人間からの脱却を学生生活の早い段階から指  
導するとともに、合わせて学生の多様化の正の一面  
を引き出していくことが重要だと考えられる。

### 3.4 モラトリウム人間への対応

モラトリウム人間への対応を考えるに際し、民俗  
学者の大林太良<sup>3</sup>の研究成果である心の発達概念を  
参考にしたい。現在行われている学校教育と心の発  
達を促す教育との関係を「心の発達と学校教育」と  
してまとめたものが図－1<sup>4</sup>である。



図－1 心の発達と学校教育

こうしてみると、モラトリウム人間が誕生した要  
因として、“もやしっ子”を生む時代背景の下では、  
人類がこれまで長年にわたって獲得してきた縄張り  
意識や知力向上意欲（体系的発達）を普段の生活の  
中で、また、学校教育を通じて次の世代の一人ひと  
りの成長（個体的発達）に十分引き継がれていない  
ことだと考えられる。

こういうことから、モラトリウム人間への対応に  
ついては、まずは、家庭内や初等・中等教育段階で

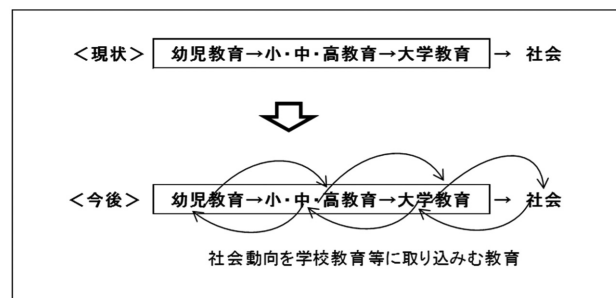
子供達が学ぶことの意味を、体験的に理解させるこ  
とである。次に続く大学教育においてもそれまでの  
体験的学習の不十分なところを社会との絆を深める  
教育で補うことだと考えられる。これについての具  
体的な展開は後述する。

## 4. 大学教育の再考

### 4.1 学生の多様化への対応

前述した2つの教育事情を解消するために、大学  
では先ずモラトリウム人間からの脱却を図ることが  
大切だと考えている。学生の多様化への対応イメー  
ジを図－2に示す。

本図において、モラトリウム人間からの脱却や多  
様化の正の一面を引き出す教育とは、単にところて  
ん式に進めるものではなく、社会に向けて学生の多  
様な正の価値観を引き出すといったフィードフォー  
ワード（→方向）と社会からの情報を学校教育にフィ  
ードバック（←方向）とから成る双方型の教育が求め  
られる。



図－2 学生の多様化への対応イメージ

このことは世界に開かれた教育、地域に根ざした  
教育を目指す本学の基本理念にも通じる考え方で、  
詳細は後述する。

### 4.2 望ましいキャリア教育のコンセプト

長い間、大学での教育は高度な知識体系を構築す  
るためのものであった。少なくとも戦前までは、学  
校でキャリア教育が行われた試しがなく、それでも  
時が来れば誰もが社会に出ていき、一人前に成長で  
きたのである。

ところが、戦後の経済成長を経た今では若者のモ  
ラトリウム化と大学の大衆化によってそのような事  
情は一変した。これまでも述べたが、価値観の多  
様化や学生のモラトリウム人間化が自主性を重んじ  
る大学では何をしたいか分からない学生を多く生  
み、大学の教育プロセスに新たな課題を投げかけた。  
年を追う毎にその課題も深刻化してきたことから、



ついに専門職能に特化した教員だけでこのような事態に適切に対応するのは困難となった。

筆者が属する教育講師室の誕生の経緯もここにある。教育講師室がキャリア教育の主たる実施部門として任に当たってから10年程経過するが、企業など実社会での豊富な経験をもつ人材（教育講師）が学生へ助言をしたことが功を奏し、結果として高位就職率を維持してきたのは事実である。

しかし、本学が私立大学から公立大学法人となって4年目を迎え、地域社会からの期待も増す現在、これまで通り教育講師の力量が問われるのは勿論であるが、社会動向や本学基本理念を念頭におけば専門職能の教員と教育講師との積極的な連携が問われる状況となっていることに留意が必要である。

このような状況を踏まえ、キャリア教育にも新たな概念、つまり、望ましいキャリア教育としてモラトリウム人間への対応の項で述べたように、社会と大学をフィードフォワードとフィードバックでつなぐ開かれたキャリア教育を実施すべきだと考え、その考え方を図-3にまとめた。

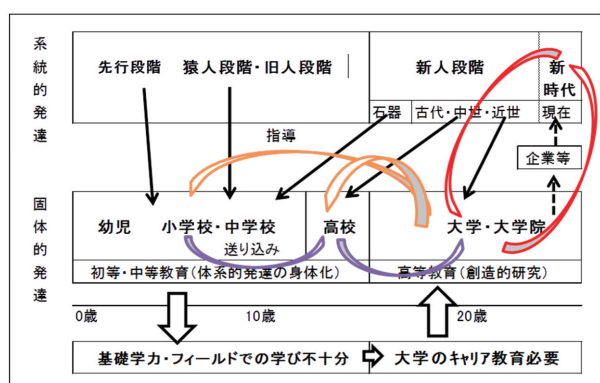


図-3 大学キャリア教育概念（循環の仕組み）

本図でいうところのキャリア教育のキーポイントは繰り返しになるが次の通りである。それは、高等教育前段の初等・中等教育での「人類の体系的発達を人間個体が受け継ぐ教育」の不備を大学が補うもので、それは社会との絆を深める教育だともいえ、モラトリウム人間への対応でもある。

つまり、大学のキャリア教育として、初年次教育として、あるいは2年次・3年次の学生を対象とした進路指導として、早い段階から学ぶこと・仕事をするものの意味を教え、年齢相応の精神発達状態に引き上げ、未来へのモチベーションを奮い立たせることである。また、大学のキャリア教育にとって、地域の学校教育に対し支援を行うことも重要な役割となろう。

したがって、キャリア教育は大学教育の本質とは

いえないものの、今では必要不可欠なものである。キャリア教育の本質は、学生が卒業し社会に出た後のことを見据えながら、専門教育（学業の仕上げとしての卒業研究を含む）が円滑に実施できるように支援していくことであると考えられる。

#### 4.3 望ましい本業としての卒業研究

今、大学では憂慮すべき教育事情を抱えていることは前述したとおりであるが、学生が早期にモラトリウム人間を脱却し、世界をリードしていける程の理念とパワーを持った人材としての芽を引き出すべく育てていかなければならない。

筆者は、この憂慮すべき教育事情を解消する手段として卒業研究にその役割を見出す。例えば、4年間の大学生活は、所定の単位が取れたから“とくてん式”に卒業するというのではなく、図-4に示すように卒業研究にも社会とのフィードフォー

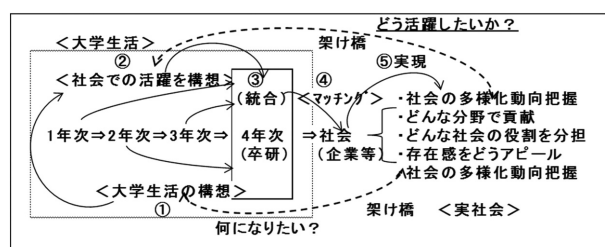


図-4 社会との関係であるべき学生生活を構想

ドとフィードバックを取り入れることで卒業研究が社会につながる恰好な学びの場とすることができると考えているからである。具体的なことは専門の教員の方々に委ねることになるが、大学生活で学ぶ共通教育・専門教育・部活動・アルバイトなどの成果の全てを卒業研究に集約・融合することで、社会の動向に対応した生きた卒業研究を行うことを推奨したい。

このような教育を行うことで、少なくとも大学で学んだ知識は社会という場で活用可能なものとなり、社会に出てからもさらに新しい情報を吸収し実際に使える知識に変えていくことも可能であって、社会で自立して生きていけることになる。

ただし、卒業研究をこのような学びの場とするには、少なくとも初年次教育において、“もやしっ子”が世界の動向を洞察し、地域の事情を考慮し、自分の夢・関心と世界の動向・地域の事情との一致点を深いところで見出し、社会における役割とか存在感を“おぼろげながらも考えて見る”という体験が必要となる。つまり、人間が本来持つ縄張り意識や知力向上意欲を呼び覚ますことが必要である。

こういった考え方をキャリア教育の早い段階で学

生に伝え、学生を未来に向かうよう叱咤激励することが重要だと考える。

## 5. 公立大学としての本学対応

### 5.1 本学の基本理念を大切にしたい教育

本学の基本理念は、地域と世界を結びつける大学教育を目指すものであることから、これまで検討してきた大学教育の在り方と合致する。

それ故、土佐の自然とそこに暮らす素朴な人々との関わりの中で本学全ての教員は、本学の基本理念を理解しつつ教員それぞれの持ち味を生かした授業を展開する必要がある。本学の基本理念を絆と考える教員が大半を占める<sup>5</sup>になると、例え教員がそれぞれ自由な方向を向いていても本学の学風としてのまとまりも出てくるであろうし、常に新鮮さも維持できるものと期待する。

因みに本学の基本理念は以下に示す通りである。

#### <本学の基本理念>

- i) 来たるべき社会に活躍できる人材の育成
- ii) 世界の未来に貢献できる研究成果の創出
- iii) 地域社会との連携と貢献

キャリア教育も本学の基本理念に沿った教育を目指すしなければならないことは自明である。

### 5.2 人材還流センターとしての本学の役割

地域の公立大学法人としての本学では地域との関わりも密接なものでなければならない。国の活力というのは、都市は勿論、地方の市町村も含めた一国の活力を総和したものと考えられるから、我が国が再生するには衰退が著しい多くの地方市町村が活性化しないと実現が困難である。

そこで問題になるのは、地域を担う人材である。筆者は、地域の活性化に貢献できる人材の資質として、一旦は外で修業した人が望ましいと常々考えている。

例えば、坂本龍馬（以下、龍馬）は、土佐を脱藩

した身ではあるが、土佐との絆を持続けたことが死しても土佐に戻ることにつながり、土佐のために今でも“まっこと”貢献している。つまり、人材の還流が必要不可欠だという考え方である。この考え方を、図－5に示す。

人材が還流する仕組みを少し大げさに比喩的に表現すると次のようになる。人間社会は宇宙の産物<sup>6</sup>である。したがって、人間社会に生きる人材も、物質やエネルギーが宇宙の彼方に拡散していくように、一旦は故郷の外に出てより広いところで活躍したいと思うのは自然の摂理である。また、物質が拡散に抗して引力で引き合い星と生命が誕生したように、一旦は故郷の外に出た人材が広い世界で活躍したいという思いに抗して、縦（祖先・子孫）と横（隣人）との絆（引力に相当）によって故郷に引き返すことは可能だと考えられる。

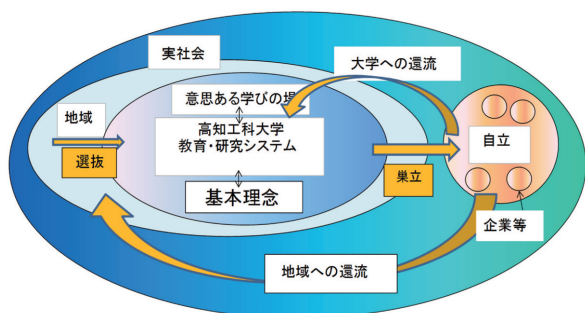
しかし、若者が一旦は外に出て成長して戻ってくることの大切さを実感しなければその効果は期待できない。よって、人材の還流システムを地域が作ることも勿論必要であるが、地域の公立大学法人として、このことを学生が実感できるような授業を行うことが期待される。

### 5.3 本学が立地する地域資源の活用

土佐にある大学の強みを生かして、土佐に育った龍馬をテーマに「大学の将来に向けた取り組み」を考えたらどうかと提案したい。龍馬の脱藩の思いは、“交易を通じて国を開く”ことにあった。本学の基本理念もまた「土佐にあつて“世界”に通じる開かれた大学」を目指していることから、両者は“開く”という意味では本質的に同じである。

幕末から明治に生きた龍馬が、士族制度の無言の抑圧にも屈せず、遠くの開かれた世界に憧憬したその“先見性”に学ぶとすれば、工科大学という理系の専門教育の中にあっても、社会と通じる幅広い見識（あるいは教養）が必要だということを示唆している。そんな見識、教養とは、例えば、文明の選択とはどういう意味を持つのか、自然と共生することとはどういうことか、ストックエネルギーからフローエネルギーに転換していくどんな技術を開発していったらよいか、文明の本質とはどういうことか、自然と共生した文明を選択したら西洋文明はどうなるのか、地球はどういう姿になるのか、人間はどう生きなければならないか、等今を批判を交えて幅広く考察することである。そのためには龍馬も読んだはずの難しい本を学生は読まざるを得なくなるであろう。

龍馬に話を戻せば、彼は日本の行く末を案じたか



図－5 人材還流センターとしての大学

らこそ、あるいは、交易を自由に行っている外国の様子を学んだからこそ、“船中八策”の構想が出来たものと考えている。このことは、エンジニアを志望しながらも、エンジニアが活躍できる社会を創出するためにも、政治・経済・文化・哲学などの分野に幅ひろく興味を抱くことの大切なことを龍馬は教えてくれているのである。

これは、リーダーとしての資質や教養を磨くことにもなるし、何よりも本来の教育としての高度で新たな知識体系の構築意欲につながる原動力となるであろう。

#### 5.4 今後のアクション・プラン

これまでのキャリア教育の論議からすれば、大学のキャリア教育もまた点検・見直しが必要である。今後どのようにこの点検・見直しを実行に移していくかが問われる。このようなキャリア教育の点検・見直しのための行動計画の試案として図-6に示すアクション・プランを提案したい。

項目	年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度
自身のキャリア教育取組		1年目の挑戦	2年目の挑戦	3年目の挑戦	4年目の挑戦
キャリア教育改善手順		課題の把握	キャリア教育の点検※	全体の整合性検証	“提案”
“テーマ：学生の学習意欲を引き出す”			シナリオ構想	シナリオ検証	
			社会動向、業界動向などの調査研究		
※キャリア教育の点検項目 A：基本理念とキャリア教育との関連 B：専門教育とキャリア教育との関連 C：キャリア教育の理念・ビジョン・戦略構想 D：キャリア教育授業の再編（内容・時期） E：キャリア教育実施体制等（業者委託含む） F：就職ハンドブック再編					

図-6 今後に向けてのアクションプラン

最近、「大学におけるキャリア教育を考える」というFDフォーラム<sup>7</sup>に参加した。そこでは、キャリア教育の進め方に多くの考え方があり、どの大学でも試行錯誤しながら取り組んでいる状況<sup>8</sup>が見られた。特に注目したのは、キャリア教育の本質を各大学とも学生の意欲を引き出すことだと認識していた点である。

筆者も1年前に本学教育講師として着任後、試行錯誤を繰り返しながら学生のキャリア教育に取り組んでいるところである。本学のキャリア教育は先人たちが築き上げた10年程の歴史があり、学生を育て就職率の高位確保という点では誇れる成果を残している。

ここで、気になるところは、現行のキャリア教育が本学の基本理念と整合性が取れているのか、取れていないのが不明な点である。筆者は、この点に留意しながら、これまでの実績と成果を誇る本学キャリア教育をさらに“学生の学ぶ意欲”を引き出し得

るキャリア教育とすべく努力していきたいと考えている。

限られた年限であるとはいうものの今後2年から3年をかけて、本学の基本理念をもとに現行のキャリア教育をレビューし、学生生活の進展に対応させた3段階のキャリア教育を提案していきたい。

例えば、1年次・2年次でキャリア教育の基礎編（現行のSS1&CP2&CP基礎相当＋学生の将来構想支援）を行い、3年次には応用編（現行のCP1・インターンシップ体験相当＋学生の将来構想と企業理念とのマッチング支援）を行い、4年次には仕上げ編（卒業研究の支援＋社会人としての心構えの伝達）を行うといったシナリオ構想<sup>9</sup>である。

## 6. おわりに

キャリア教育は、社会と密接に関係している。現在の教育環境では大学のキャリア教育は年々その重要性を増してきており、未来志向型のキャリア教育が必要だと実感している。

本学紀要への投稿もこのような未来志向の考え方に基づくものであって、多くの方からご意見を賜われれば幸いである。今後の改善に生かしていきたい。

## 註

- 1 筆者は人間社会を熱力学的に捉えている。この考え方はこの論文の基底を成すものである。尚、熱力学の基本的な考え方の説明は文献9) 10) を、人間社会の熱力学的な捉え方は文献11) 12) を、歴史の熱力学的考察は文献13) 14) を、哲学・文明の熱力学的解釈は文献15) を、宇宙との関連は文献16) を参照のこと。
- 2 日本文化は長江文明（稲作・漁撈文明）に由来し、西洋文明はメソポタミア文明（畑作・牧畜文明）に由来する。これらの補足としては文献17) 18) を参照。
- 3 大林は、体系的発達、個体的発達という2つの概念で、人間の心の発達を受け継ぐ仕組みを説明する。体系的発達概念と個体的発達概念とは、文献19) を参照。
- 4 図-1は、前述の大林の心性の発達に関する概念を参考に、筆者が作成したものである。
- 5 本学基本理念が絆と化するには、本学理念に対する本学としての強い志と本学と教員相互の深い信頼が必要である。本学教員の大半が基本理念を共有するには本学の運営側の努力もまた不可欠である。
- 6 宇宙は熱力学的な世界である。宇宙の産物とし



ての人間で構成される人間社会もまた熱力学的だという考え方。文献16)の他に文献20) 21) 22)を参照。

- 7 公益財団法人・大学コンソーシアム京都主催の第17回FDフォーラム (H24年3月3日/4日、於いて立命館大学)。文献5)を参照。
- 8 前述のFDフォーラムでは、キャリア形成ノウハウを正課として教え込むことが多くの大学に浸透している中で、企業が求める人材を大学が育成するのか、大教室での学生参加型学習は良いのか悪いのか、従来型のじっくり教え込む授業のどこが悪いのか、といったようなキャリア教育をめぐる多様な意見が見られた。結局はキャリア教育についての統一的意見は見られず、各大学の工夫が重要であるとの認識に至った。
- 9 就職を志望する学部生と進学を志望する学部生ではそれぞれに対応した別々のキャリア教育を実施する必要があるように見受けられる。学部卒業生は現行社会の発展に力を入れたキャリア教育となろうし、大学院進学志望者は明日の社会に力を入れたキャリア教育となろう。

## 文献

- 1) 岡村 甫, “教育講師制度の創生”, 高知工科大学紀要第7巻第1号, pp.139-140, 2010年7月
- 2) 瓜生敏之, “巻頭言”, 高知工科大学教育講師室紀要2009年度, 2010年3月
- 3) 河田耕一, “大学と高等学校の連携”, 高知工科大学紀要第8巻第1号, pp.129-137, 2011年7月
- 4) 井形元彦, “高知工科大学に奉職して”, 高知工科大学教育講師室活動報告2010年度, pp.73-77, 2011年3月
- 5) 公益財団法人・大学コンソーシアム京都, 2011年度第17回FDフォーラム・レジュメ&資料集 (大学におけるキャリア教育を考える), 2012年3月
- 6) 日本経済新聞社, “大学生、もっと勉強を (中教審部会が提言)”, H24.3.27 朝日新聞朝刊
- 7) 半田智久, “GPA制度の信頼性”, 講演資料 (2012年1月25日, 於いて高知工科大学)
- 8) 参院調査室, “過疎対策の現状と課題”, 立法と調査No300, p19, 2010年1月
- 9) 細野敏夫, エントロピーの科学, 1991年8月
- 10) イリヤ・プリゴジン/ディリプ・コンデブデイ (妹尾 学/岩本和敏訳), 現代熱力学-熱機関から散逸構造へ-, 2001年5月初版
- 11) 清水 博, 生命を捉えなおす, 2008年11月増補版9版
- 12) N.ジョージェスク・レーゲン (高橋正立訳), エントロピー法則と経済過程, 2006年9月第2刷
- 13) 宮崎市定, 宮崎市定全集21 日本古代, 1993年2月
- 14) 宮崎市定, 宮崎市定全集18 アジア史, 1993年4月
- 15) O・シュペングラー (村松正俊訳), 西洋の没落第1巻&西洋の没落第2巻, 2007年普及版
- 16) 岡村定矩・池内 了・海部宣男・佐藤勝彦・永原裕子編, 人類の住む宇宙 (シリーズ現代天文学 第I巻), 2010年4月
- 17) 梅原 猛・安田喜憲, 長江文明の探求, 2004年8月
- 18) 安田喜憲, 龍の文明・太陽の文明, 2001年
- 19) 大林太良, “図-1人間の心性の系統的発達段階と個体的発達の対応図”, 心の中の宇宙, pp.48-49, 1996年10月
- 20) 吉田直紀, 宇宙で最初の星はどうやって生まれたのか, 2011年10月
- 21) 村山 斉, 宇宙は本当にひとつなのか, 2011年8月
- 22) スティーヴン・ホーキング/レナード・レナード・ムロディナウ (佐藤勝彦訳), ホーキング宇宙と人間を語る, 2011年1月

# A Study of Career Education aimed at Realizing the Basic Policy of KUT

**Shoji Kobayashi**

(Received: April 17th, 2012)

Educational Lecturer's Office, Kochi University of Technology  
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami city, Kochi 782-8502

E-mail: kobayashi.shoji@kochi-tech.ac.jp

**Abstract:** Studying about the diversification of student's characters again, I made the desirable concept of the carrier education clear and knew what the carrier education ought to be. As a result, I came out to the conclusion that we should promote the carrier education which was matched with the basic idea of KUT. So I will make a proposal about the action plan for its realization.